



Data

監督・脚本・製作: 王家衛 (ウオン・カーウアイ)

出演: 梁朝偉 (トニー・レオン) / 章子怡 (チャン・ツイイー) / 張震 (チャン・チェン) / 張晋 (マックス・チャン) / 宋慧教 (ソン・ヘギョ) / 王慶祥 (ワン・チンシアン) / 趙本山 (チャオ・ベンシヤン) / 小沈陽 (シャオ・シェンヤン)

👁️👁️ みどころ

あなたは「ブルース・リーの師」としても有名な葉問 (イップ・マン) を知ってる? また、少林寺拳法でもなくジャッキー・チェンの『酔拳』でもない、詠春拳を知ってる? 本作を観れば、中国大陸で複雑に分布する中国拳法の各流派と、その宗師たちによる「一代宗師」(グランド・マスター) 争いの激烈さがわかるはずだ。

まずは、「数年間に及ぶハードなトレーニングに極限まで打ち込んだ」有名俳優たちのアクションをたっぷり堪能。そして、日中戦争というあの激動の時代背景のお勉強もしっかりと!

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 甄子丹に続いて、梁朝偉が葉問を! ■□■

『スピリット』(06年)で李連杰 (ジェット・リー) が霍元甲 (フォ・ユアンジャ) を演じた(『シネマルーム17』85頁参照)のなら、甄子丹 (ドニー・イェン) は『イップ・マン 葉問』(10年)『シネマルーム26』213頁参照)でイップ・マンを! 霍元甲もイップ・マンも中国人なら誰でも知っている武術家だが、日本人の私はこの2本の映画ではじめて霍元甲とイップ・マンの名前とその生きざまを知った。『スピリット』のハイライトは1910年9月14日に上海で開催された史上初の異種格闘技戦における、霍元甲と2mを超すアメリカ人の巨漢レスラーとの対決だったのに対し、『イップ・マン 葉問』のハイライトは1950年に香港で開催されたイップ・マンとイギリス人のボクシング世界チャンピオンとの対決だった。

他方、張藝謀 (チャン・イーモウ) 監督の『HERO (英雄)』(02年) (『シネマルーム5』134頁参照)では、①ジェット・リーが「十歩一殺」の剣の無名 (ウーミン) を、

②ドニー・イェンが比類なき槍の名手である長空（チャンコン）を演じ、③梁朝偉（トニー・レオン）は書道を通じて剣の奥義をきわめた残剣（ツァンジェン）を演じていた。そうすると、トニー・レオンも、一度はイップ・マンを演じなければ……。王家衛（ウォン・カーウァイ）監督が構想17年を経て実現させたという本作『グランド・マスター（一代宗師／THE GRANDMASTER）』は、引退する北の八卦掌（はっけしょう）の宗師である宮宝森（ゴン・パオセン）（王慶祥／ワン・チンシアン）の地位を引き継ぎ、南北武術界の統一をするのは誰か、という壮大なテーマだから、詠春拳（えいしゅんけん）で南を代表する武術家のイップ・マンは当然その第一候補。そこで、ドニー・イェンに続いて今度は俺が！とトニー・レオンがイップ・マン役に挑戦することに。

『イップ・マン 葉問』はイップ・マンが1950年に香港にやってきてからの物語だったが、本作は1936年にゴン・パオセンが南の佛山という地で開いた引退試合に、南に住む詠春拳の宗師イップ・マンが参加するところからスタートする。したがって『イップ・マン 葉問』と本作両方を観れば、人間イップ・マンの生涯はほぼ網羅できることになるが、さてドニー・イェンに続いてイップ・マンを演じたトニー・レオンのイップ・マンぶりは？



© 2013 Block 2 Pictures Inc. All rights reserved.

■□グランド・マスター争いの対抗馬は？■□

中国の拳法と言えば、日本では少林寺拳法が最も有名で、ジェット・リーのデビュー作となった『少林寺』（82年）や最新作の『新少林寺（新少林寺／SHAOLIN）』（11年）等は興味深かった（『シネマルーム27』47頁参照）。しかし中国の拳法は歴史が長

いうえ、大きくは北派拳術エリア（形意拳、八卦掌、八極拳）と南派拳術エリア（詠春拳など）に分かれていることが、本作を観ればよくわかる。ちなみに、成龍（ジャッキー・チェン）の『酔拳』『蛇拳』『龍拳』はあくまで映画用の拳法？それとも・・・？

それはともかく、「李小龍（ブルー・スリー）の師」としても有名になったイップ・マンは、7歳の時に詠春拳の門下に入った後、三代目宗師を引き継ぐとともに、高貴な家系の妻・張永成（チャン・ヨンチェン）（宋慧教/ソン・ヘギョ）との間に2人の子供も生まれ、十分豊かで満ち足りた暮らしを送っていたことが本作前半で描かれる。映画冒頭に見る、雨の中での激しい闘いのシーンは圧巻だが、本作前半に見るイップ・マンは腕は立つうえ、人格は円満そして礼儀正しい男という描き方だから、パオセンが彼を気に入ったのは当然。そしてパオセンが出した手の中の「餅を割ることが出来るか？」という何とも哲学的な「質問」とそれを巡る「試合」によって、イップ・マンはパオセンから「あなたに後を託そう」と合格点をもらうことに。すると、そこで面白くないのが、パオセンの一番弟子である馬三（マーサン）（張晋/マックス・チャン）だ。実力的にはこのマーサンがイップ・マンのグランド・マスター争いの対抗馬だったが、「直接対決」をさせてもらえないまま「破門」同様の扱いを受けたことにマーサンが怒ったのは当然。そのうえ、師匠が一番弟子の自分を後継者に選ばず、他派である詠春拳のイップ・マンを後継者に選んだのだから、マーサンの怒りが頂点に達したのは当然だ。しかして、一番弟子マーサンの師匠パオセンに対する怒りと恨みはどこまで発展していくの？

1937年の盧溝橋事件に始まる日中戦争と、中国国内で起きた南部軍閥と蒋介石国民党軍との軍事衝突がそのストーリー形成に大きく関連してくることに注意しながら、その展開を見守りたい。

■□■「六十四手」を承継した宗師の娘の選択は？■□■

ウォン・カーウアイ監督が本作のキャスティングにあたって俳優に出した絶対条件は、「数年間に及ぶハードなトレーニングに極限まで打ち込むこと」だったらいい。したがってイップ・マンを演じたトニー・レオンやマーサンを演じたマックス・チャンはもちろん、パオセンの一人娘で唯一人「八卦掌の六十四手」を承継した宮若梅（ゴン・ルオ



© 2013 Block 2 Pictures Inc. All rights reserved.

メイ）に扮する章子怡（チャン・ツイイー）も、流派の宗師に正式に弟子入りして数年間の訓練を受けたらしい。その成果もあって本作に見るチャン・ツイイーのアクションは『グリーン・デスティニー』（00年）で見たようなワイヤーアクションではなく、かなりのホ

ンモノになっているが、それでもやはり映像テクニックに頼っている面は否定できない。

ちなみに、私は本作を鑑賞して帰った直後にあるテレビ番組から千葉真一のアクションについての取材を受けたが、そこで思い出したのが千葉真一が主催していた「ジャパンアクションクラブ (JAC)」(2004年にジャパンアクションエンタープライズ (JAE) に改組)における志穂美悦子の見事なアクション。1970年代に『女必殺拳』『女必殺拳危機一発』『帰って来た女必殺拳』等で見た志穂美悦子のアクションはすべて生身によるホンモノだったから、その迫力はすごかった。それに比べるとチャン・ツイイーのアクションはまだまだという感じだから、イップ・マンとの愛の芽生え(?)とも言うべき対決はともかく、パオセンの一番弟子たるマーサンとの対決結果はちょっと意外……?

本作はチャン・ツイイーを主要キャストとして登場させることによって「グランド・マスター」争いというメインストーリーとは別にパオセンの一人娘として八卦掌一門を守るのか?それとも愛に生きるのか?という「選択」をサブストーリーとしている。したがってルオメイが愛に生きるのなら、もともと決まっていた婚約者との結婚もあれば、新たに芽生えたイップ・マンとの愛(?)に身を投げ出す道もあったはずだ。しかして、本作に見るルオメイの選択は?そして、その結果必然的に生じることになるパオセンを殺したマーサンとの対決は?



© 2013 Block 2 Pictures Inc. All rights reserved.

■張震演ずるカミソリの生きザマにも注目! ■

台湾出身の張震 (チャン・チェン) は、田壯壯 (ティエン・チュアンチュアン) 監督の『吳清源 極みの棋譜』(06年) (『シネマルーム17』249頁参照) や韓国のキム・ギドク監督の『ブレス (息/BREATH)』(07年) (『シネマルーム19』61頁参照)

では静かなながらクセの強い役を見事に演じた。また呉宇森（ジョン・ウー）監督の『レッドクリフ Part I』（08年）（『シネマルーム21』34頁参照）、『レッドクリフ Part II』（09年）（『シネマルーム22』178頁参照）では、孫権役を演じて大きな存在感を見せていた。しかし私には、彼はアクションにはあまり縁のない俳優というイメージが強かったが、本作でチャン・チェンは八極拳の宗師でありながら国民党の特務機関の職員として日本軍から追われるクセのある男、一線天（カミソリ）を演じている。手を血まみれにしながら車内に逃げ込んだカミソリを、思わずルオメイが自分のコートをかけて仲良く隣で眠り込む芝居をすることによって日本軍を欺くシーンを見ていると、思わずここにも恋の芽生えが・・・とってしまうが、さてその展開は？

本作後半は IPP・マンが香港に移り詠春拳の指導を始める1950年からの物語になるが、『カムイ外伝』（09年）における「抜け忍」カムイのように（『シネマルーム23』187頁参照）特務機関との壮絶な抗争の末にそれを離脱したカミソリも香港で八極拳を弟子たちに教えることになる。IPP・マンの詠春拳とカミソリの八極拳との違いはプレスシートに詳しく書かれているが、スクリーン上でそれを判別するのは素人にはムリ。しかし、冒頭の雨中で見せる IPP・マンのアクションと同じように、本作中盤に雨中でカミソリが見せるアクションも迫力満点だからそれに注目！日中戦争が激化する中マーサンが日本側について1940年には満州国奉天の協和会長に就任したのに対し、カミソリは逆に国民党の特務機関としてウラで活躍したという選択は興味深い。しかし本作を観れば、その後に見せるカミソリの生きざまはもっと興味深いから、それをじっくりと観察したい。



■□■激動の時代背景のお勉強もしっかりと！■□■

1931年に満州事変が起き、1937年の盧溝橋事件によって「日中戦争」勃発に至ったことはよく知られているが、 IPP・マンが佛山に住んでいたことは日本人はほとんど誰も知らないはず。さらに佛山には「金楼」という有名な娼館があり、男たち（武術家たち）の会合(?)はなぜかそんな娼館で行われていたことも日本人は知らなかったはずだ。その佛山で IPP・マンはパオセンからグランド・マスターの承継者と認められたが、1937年に日中戦争が始まり、1938年10月に日本軍が IPP・マンの住む佛山に侵攻すると、IPP・マンの屋敷は憲兵隊に奪われてしまったうえ、いろいろと援助してくれていた金楼の主人も爆撃で死んでしまったから、IPP・マンは戦争による大変な事態をはっきり認識せざるをえないことに。さらに前述のように、パオセンの一番弟子だったマーサンは日本軍につき、八極拳のカミソリは国民党についたが、さて IPP・マンは？

私が大学に入ったのは1967年4月だが、その直後に大学紛争が「勃発」したため、私たちはそれぞれが自分の生き方の選択を迫られることになった。しかし、その中でもいわゆるノンポリ学生たちもたくさんいた。本作を観ていると、いかにも IPP・マンはそのノンポリ学生と同じように見えたが、実はそうではなく、彼は国民党の要職に就いていたらしい。すると、1945年の敗戦によって中国大陸から日本軍がいなくなった後、彼は中国共産党との「内戦」に明け暮れていたことになる。なるほど、1950年に IPP・マンが香港に現われ、港九飯店職工總會で詠春拳の指導を始めたのは国民党の幹部だった IPP・マンがやむなく香港に亡命した結果というわけだ。

本作前半には日本軍に陥落する前の佛山における IPP・マンと美しい妻そして2人の子供たちとの幸せな情景が描かれるが、IPP・マンが詠春拳の宗師としてグランド・マスター承継戦に出かけた後は、二度と妻子と会うことができなかつたことがウォン・カーウァイ監督が紡ぎ出す美しい映像の中で描かれる。さらに、マーサンとの対決に勝利したルオメイは八卦掌の六十四手を承継させることなく、香港で診療所を開いて生計を立てていたらしい。しかして、1952年にルオメイから呼び出された IPP・マンが「今夜ははじめをつけたくて」と語り始めるルオメイの「最後の告白」を聞くシーンでは、ルオメイの生きざまがひしひしと伝わってくる。若干ストーリーが散逸しすぎる面はあるものの、本来であればそれぞれが自分の武術家としての道を極めればよいだけであつたにもかかわらず、彼ら彼女らは否応なくあの激動の時代の洗礼を受けざるをえなかつたわけだ。したがって、本作に見る IPP・マンをはじめ多くの宗師たちの生きざまを理解するについては、あの激動の時代背景のお勉強もしっかりと！

2013(平成25)年4月19日記